

映画『ジョバンニの島』 主人公のモデル・得能宏氏との対談

対談

映画『ジョバンニの島』
主人公のモデル・得能宏氏との対談

道東 | a weekend trip



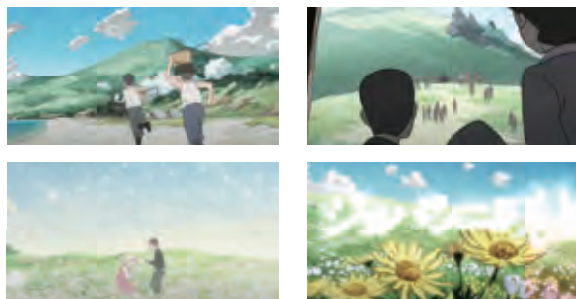
ソ連軍による色丹島上陸前後の様子等を実話に基づいて描いた映画『ジョバンニの島』
今回、その主人公のモデルとなった色丹島の元島民・得能宏さんと対談をしました。



映画『ジョバンニの島』は、元島民であり、今も「語り部」として活躍されている得能宏さん（色丹島出身）の経験を踏まえた、色丹島が舞台のアニメーション映画です。

2014年2月、一般社団法人日本音楽事業者協会創立50周年記念作品として公開されました。

北方四島のひとつ色丹島にソ連軍が進駐。二度と故郷に帰ることが出来なくなった人たちの悲しみ、父との再会を想い続ける幼い兄弟。過酷な運命に翻弄されながらも誇り高く生きる人々を描いた物語です（主人公の少年「純平」のモデルが得能宏さん）。

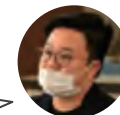


対談

映画『ジョバンニの島』
主人公のモデル・得能宏氏との対談

道東 | a weekend trip

今日は貴重なお時間をいただき、ありがとうございます。実は得能さんとは初めましてではなく、以前お会いしたことがありまして、2017年に私が参加した北方領土ビザなし交流で、色丹島に出発する際に得能さんが港までお見送りに来てくださって、その際にお話をしました。



福元



得能氏

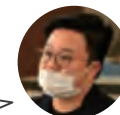
そうでしたか！

本当に申し訳ないんですけど、私は今度88歳を迎える歳でだいぶ歳を取ってしまって、思い出そうにも思い出せなくてね。ただこうやって皆さんとお会いして「前に会ったんだよ」と言われると、もう記憶にはないんだけど嬉しいよ。

今現在、コロナが小康状態を保っているとはいえ、世界的にはそうでもない現状があるわけですよね。いっそう気持ちが滅入ってしまう状況で、幸いだと思うのは、全国から、コロナに負けないでがんばって来てくれること。従来だったら、相当多くの方が、若い人たちがこの現地の根室に来てくれる。そこから得るものは、大変多かったと思う。それが返還運動の原動力になっていることは間違いないと思っているし、私たち元島民は今でなければ語れないことがたくさんあるわけですよ。それを聞いてもらえるのは本当にありがたいよ。

そのように言うてくださって光栄です！

また色丹島訪問では、得能さんのお姉さんと、『ジョバンニの島』でも描かれていた得能さんの親族が眠るお墓にも手を合わせました。



福元



◀2017年
色丹島に出発する
直前 根室港にて



◀2017年
色丹島・斜古丹の
得能家墓にて



得能さんの生まれ故郷でもある色丹島を主な舞台にした映画『ジョバンニの島』では、ソ連軍侵略後の得能さんを始め、元島民に起こった様々な出来事が描かれていました。



福元

ソ連軍侵略後、これまでの生活はどれもこれも奪われ、また色丹島を出て本土に戻るまでかなりひどい扱いを受けてきて、周りの親戚を始め多くの人が厳しい環境の中で亡くなったことは紛れもない事実だし、許されることではないよ。

ただ、これまで一度も敵対心が生まれたことはないね。



得能氏

作品の中ではソ連人との交流も軸に描かれていましたが、敵対心が生まれたことがないというのは、色丹島での彼らとの生活が関係するのでしょうか？



福元



得能氏

その通り。私の場合はソ連軍侵略後の3年間、11歳から13歳まで、ソ連の軍人とその家族と色丹島で共に生活してきたよ。その3年間の彼ら彼女らとの思い出というのは、まさに「国は違っても人は同じなんだ」ということを分らせてくれたね。

だから、毎回色丹島を訪れる度に、彼ら彼女らとは人種は違っても同じ故郷を共有していて、自然と打ち解けあうことができるんだよ。

本日は得能さんと再会を果たすことができ、そして何より元気なお姿を拝見することができ、多くのお話を聞けたこと、大変光栄に思います。今後どうかお身体を大切に、得能さんの健康を何よりも願っています。



福元



得能氏

こちらこそありがとう。

こうやって皆さん方にお会いして、お話を聞いてもらったり、皆さん方の思いを聞かせてもらったりすることは、これからの北方領土返還運動の拡大していく歴史を作っていくことにつながる。元島民のいるうちは元島民が基礎になっているんだけど、やがていなくなる。そのときは、当然皆さん方が大きな基礎になっていくわけですよね。僕はそう信じて、多くの人のところに島民として体験したことや元島民の思いというものをお伝えしてきた。

何年か経つうちに、大きな、ひとつの点が線になる。僕はそういう表現を使うんだけど、ひとつの点が動くことによって、線から面につながっていくと。あちこちで不穏な行動が起きている現状のなかで、皆さんのような若い人が自分たちの目で見えて、やがて皆さん方の心の中から、北方領土に対する思いというのが、どういう形で返還運動につながっていくのか。皆さん方がどんな動きをしてくれるのか。これからあなたたちのお力でもってどう成し遂げられていくのか。将来的に、必ず成し遂げられるんだと僕は確信しています。

